りんご情報 No.13

令和７年　９月１２日発行
ＪＡグリーン長野営農販売部・経済部

◆当面する重点作業

１．高温干ばつにより、日焼け果が多いので葉摘みに注意する。
２．高温乾燥が続く場合は、定期的にかん水を行う。降雨が多く滞水する場合は排水を行う。
３．中生種の着色管理と適期収穫に務める。
４．８月下旬より、ふじに小ヒビの発生が見られる。特に樹勢が低下している樹に目立つ。８月のまとまった降雨で急激な果実肥大をした事が要因と考えられるが、今後の肥大に伴って、裂果の発生が心配されるため、園内をよく見まわる。
５．８月下旬より、炭そ病・輪紋病の発生が見え始めた。天候から昨年より少ない状況だが、８月はまとまった降雨があり、今後の発生が心配される。特に昨年多発した園は、菌密度が高いため注意をする。発生が見られた場合は、見つけ次第除去し園外に持ち出すか土中に埋め、二次感染を防ぐ。
６．シンクイムシ類の発生が多い場合は、防除間隔、散布ムラ等に注意する。

◆特別薬剤散布について《今年は、必ず実施！》

本来は、特別散布だが、本年は実施したい。

１．散布時期：９月１７日(水)～２２日(日)　**収穫中の品種は、散布後 24 時間経過すれば、収穫可能。**
２．調 合 量：水１００ℓ当り　※混用順に記載。　　散布日　　月　　日

農薬名	使用量	対象病害虫	収穫前
展　　着　　剤	１０mℓ	―	―
（留意事項②殺虫剤参照）		シンクイムシ類	①参照
ストライド顆粒水和剤	６６ｇ	すす斑病・すす点病・斑点落葉病・黒星病	前日

３．散 布 量：１０ａ当り⇒５００ℓ以上
４．散布上の留意事項
①ストライド顆粒水和剤は高温時に使用すると薬害が発生する場合があるので、涼しい日を選んで（当日だけでなく翌日も）使用する。
②シンクイムシ類の発生が多い場合は、フェニックスフロアブル 4,000 倍（水 100ℓ当り 25mℓ・収穫前日・年 2 回）・エクシレルＳＥ5,000 倍（水 100ℓ当り 20mℓ・収穫前日・年 3 回）を加用散布する。なお、年間使用回数に注意する。なお耐性がつかないよう、いずれか一度のみの使用とする。なお、ハスモンヨトウ又はヨトウムシにも登録があるため、若齢幼虫であれば効果が期待できる。
③リンゴワタムシ及びカイガラムシ類発生園は、トランスフォームフロアブル 2,000 倍（水 100ℓ当り 50mℓ・収穫前日）を加用散布する。
④果面の汚れ軽減のため、通常展着剤に代えて特殊展着剤ササラ 3,000 倍（水 100ℓ当り 33mℓ）を使用しても良い。
⑤収穫中・収穫間近な品種は農薬の汚れが付くので散布しない。

◆葉面散布剤の使用について

いずれも定期防除に混用して散布しても良い。日中の高温時には散布しない。

１．ふじの着色向上対策

ふじの地色の抜けを良くし、着色向上・糖度の向上を図ることを目的に、次のいずれかのリン酸肥料を２～３回散布する。なお、強樹勢やハダニ類の被害にあった樹は、必ずしたい。

１）使用肥料・倍率の例

商品名	使用倍率	内容
メリット赤	300～500 倍(水 100ℓ 当り 330～200ｇ)	Ｐ10－Ｋ9－微量要素
色一番Ｅ	1,000～2,000 倍(水 100ℓ 当り 100～50ｇ)	Ｐ42－Ｋ28－微量要素
カルビタＰ	770 倍(水 100ℓ 当り 130ｇ)	N2.2-P14.5-K1.9Mg1.1 -Mn0.27-B0.31 カルシウム補給にもなる。

２）使用時期：１回目９月中旬・２回目９月下旬・３回目１０月上旬

３）留意事項

①樹勢が落ち着いている樹で使用する場合は、第１回目の散布をメリット赤に代えて、メリット黄 500 倍(水 100ℓ 当り 200ｇ)を使用すると良い。

２．留意事項

１）リン酸肥料とカルシウム肥料と基本混用しないが、カルタス又はカルビタは混用可能。
又は、混合されている、カルビタＰを使用する。

２）薬剤散布に混用してもよい。この場合展着剤は、不要です。

３．ハダニの被害にあった樹の対策

ハダニにより葉の色が赤くなってしまった場合は、葉の光合成能力が低下し果実の熟期が遅れや、着色、糖度が上がらない。

このため、地色の抜け・着色・糖度の向上を目的に、次のいずれかの葉面散布肥料を散布する。

１）使用肥料・倍率の例

商品名	使用倍率
オルガミン	1,000-2,000 倍(水 100ℓ 当り 100-50 mℓ)
ケルパック６６	500-1,000 倍(水 100ℓ 当り 200-100 mℓ)
友果	500-1,000 倍(水 100ℓ 当り 200-100ｇ)

２）使用時期：薬剤散布の度に混用するとよい。単用散布でも可。

◆落果防止剤のストッポール液剤散布について

１．調合量と散布日：(収穫２５日前頃)　展着剤は加用しない。

対象品種	水 100ℓ 当り調合量	散布時期目安	実際散布日
シナノゴールド	６６mℓ	９月１９日(金)～　９月２３日(火)	月　　日
王林	６６mℓ	９月２４日（水）～９月２８日（日）	月　　日

３．散　布　量：１０ａ当り⇒３００ℓ

４．散布上の留意事項

１）シナノゴールドは、収穫前落果しやすい樹のみ散布する。普通樹はわい性樹より、落果が少ない。

２）単用で１回散布する。（他の剤と混用しない）

３）散布量が多いとボケるので注意する。

４）土壌が乾燥していると効果が低下するので、乾燥している場合はかん水を実施後、散布する。

５）朝か夕方（風がないこと）散布する。

◆秋映・シナノスイートの着色管理について

１．葉つみの時期が早いと日焼けをおこすので、９月上中旬頃から実施する。
　西日のあたるところは日焼けになりやすいので、特に注意して行うる
　行う場合は、密着している葉程度の実施する。
　着色に影響しない果実周りの立っている葉を残し、糖度向上と日焼け防止を図る。
２．日焼け防止の為に葉摘みや支柱立ては果実温が十分に上がった午後から実施する。
　また、徒長枝の切りすぎや葉の摘みすぎに注意する。極端な葉つみは日焼けの発生や着色を不鮮明にし、さらに来年の花芽形成も悪くするので注意する。

◆秋映・シナノスイートの収穫及び出荷目揃い会並びにふじ着色管理講習会開催について

開催日	曜	開催時間	開催場所	担当
９月２５日	木	午前１１：００	川中島共選所	松橋
			若穂流通センター	寺澤
		午後　２：００	中真島　中央道	根津
９月２６日	金	午前　９：３０	西部流通センター(車は東側駐車場へ)	徳武
		午前１１：００	塩崎共選所	徳武
		午後　１：３０	瀬原田　福島宏之様園	徳武
		午後　３：００	有旅集荷所	徳武

◆有袋ふじ除袋（一挙除袋専用袋）について

１．除袋時期：９月下旬日頃

◆ふじ着色管理について

１．葉つみ前に支柱立て、枝つりを徹底する。
２．９月末頃は、徒長枝を中心に葉つみを開始する。徒長枝は先端の葉だけを残してズッコク。
３．日陰を作っている徒長枝の葉を、先端のみ残してコク。むやみに切らない。
４．葉つみは、２～３回に分け、着色の進行に合わせて徐々に強めに実施する。
　果そう葉の場合、最初は１～２枚程度の葉摘みと摘果時より残っている果柄を落とす。
　なお、玉回しは１回目の葉摘み時に行わず、２回目の葉摘み時に行う。
　作業が間に合う場合、１０月に入ってから葉摘みを行うと効果が高い。
　１０月中旬以降になると果実の熟度も増し、気温も下がってくる。強めの葉摘みもよい。
４．樹勢が強く玉伸びがよい樹や若木は早い時期での強めの葉摘みをつつしむ(順番を最後にする)
　また、褐斑病やハダニの被害にあって葉が痛んでいる樹は葉摘みを遅らせる。

◆９月肥（礼肥）の施用について

葉を若返らせて光合成を盛んにし、花芽の充実・貯蔵養分の蓄積を図り、翌春の初期生育(開花・結実)を助ける。ただし、秋伸びを避けるため、若木・強勢樹は施用しない。

１．施用時期：①早生種　つがる＝９月中旬　②中生種　秋映・シナノスイート＝収穫終了後

２．施 用 量：一般的な成木の場合　　・有機専科　１袋を施用する。

（１０ａ当り⇒主体となるチッソ成分量で１～２kgを目安にする）

３．留意事項

①有機専科以外を使用する場合は含有成分量を計算し、適正量を施用する。

ただし、カリ過剰になっている園はカリの入っている肥料（醗酵ケイフン等）の施肥を控える。

また分解の遅い肥料は時期を早めて施肥する。

②樹勢が強い場合は、９月にスミクリン５袋を施用する。軽いため風の無い日を選んで施肥する。

◆高密植（新わい化）栽培の９月肥（礼肥）の施用について

９月～１０月に施用した養分は、根部に蓄積され３～４月の初期生育に使用されると共に、凍害軽減にもなり、高密植・新わい化栽培において秋の肥培管理は特に重要となる。

主幹先端の伸長が３０ｃｍ以上になるよう調整する。

１．施用時期

①早生種：シナノリップ・つがる＝９月中旬

②中生種：秋映・シナノスイート・シナノゴールド＝収穫終了後

③晩生種：ふじ等収穫の遅い品種は、３月頃になってから行う。

２．施 用 量

①定植２年目：「グリーン長野果樹専用有機入り 72」１袋と「果樹の力」１袋

②成木　　：有機専科２袋　（樹勢が弱い場合は３袋）

収量が多くなるに従い樹勢に応じて調整する。施肥は株元中心に行う。

３．樹勢の判断　主枝延長枝の適正伸長

①定植１年目　　：３０～５０ｃｍ（100ｃｍ伸びても良い）

②定植２年目　　：５０～１００ｃｍ（150ｃｍ伸びても良い）

③定植３年目以降：３０～７０ｃｍ

４．その他肥料

高密植・新わい化栽培では生産量が多いことから、カリウム（加里）を多く消費するので、「有機専科」に代えて「醗酵けいふん（ペレット状）」３～４袋でもよい。

「ペレット状」と「粒状」では、成分が異なるので注意する。また土壌ＰＨが高い場合は使用しない。

なお、土性診断を行うとカリウム過剰になっている園が多いので、今の所欠乏問題は無いが、今後は施肥も必要になる。

「醗酵けいふん」は、窒素肥料も含まれるが、加里や石灰も多く含まれるため、過剰の園では控える。